大津市の藁蛇を作る正月儀礼

森　本　安　紀

日本各地の儀礼には、よく藁綱が見られる。藁綱は勧請縄として神社の境内や村境に掛けたり、綱引きをするなど、さまざまな用途で見られる。

本稿では、大津市内で行われる正月儀礼で藁蛇が見られる３つの事例について報告したい。いずれも三井寺（園城寺）の鎮守社がある氏子の地区で行われており、大津市ではこれらの地区にのみ藁蛇が登場するということが興味深い。

その３社のうちの１社である三尾神社の氏子区域のなかで、最も琵琶湖に近い中保町では、１月第一日曜日（かつては１月６日）に、三尾明神の象徴であるという蛇を藁でつくり、道端に掛ける「蛇打ち神事」が行われる。この藁蛇は約30束の藁を用い、頭の直径は35㎝、全長は18ｍにおよぶもので、目にはミカンをつけ、胴の中央に榊の御幣をたてる。この蛇は尾が３本あるのが特徴で、それぞれの尾の先から15㎝ほど中央に寄ったところに御幣をたてる。現在は京阪電車石坂線の浜大津駅と三井寺駅の間にある公民館の前の木枠に、長い胴の部分は巻き付けて掛けている（写真１）。昭和13（1938）年頃までは、京都へ流れる琵琶湖疎水の入り口に架かる観音橋の東側に、道路をまたぐように建てられた木枠に掛けられていた。

この儀礼は、奈良時代の養老年間に近江国高島郡三尾が崎の観音像が大津の浜に流れ着いた時に、この像の上に乗っていた３匹の小蛇が陸に這い出て、三尾明神のいる山を仰いだということから始まったという伝承がある。10日間掛けられていた藁蛇は１月15日に三尾神社境内へ移され、氏子が持ち寄った注連縄や古札と一緒に燃やされる。かつてはこの火を薪やろうそくに移して家に持ち帰り、その火によって小豆粥を炊いて邪気を払うといわれていた。

この中保町の東隣に位置する尾花川は早尾神社の氏子区域の中で最も琵琶湖に近い地区である。ここでは１月14日の夜「蛇の顔見せ」とよばれる、藁蛇を担いで各家をまわる儀礼が行われる。この日の昼間に公民館で２体の蛇を、それぞれ約40束の藁を使って作る（写真２）。藁蛇の頭は50㎝、長さは約５ｍで、首に細い縄を20回巻くのが雄で、22回巻くのが雌とされている。かつては、子どもたちが持ち寄った藁で、長さを競い合うようしていたという。18時すぎに子どもたち（かつては男児のみ）が集まり、藁蛇を載せた梯子を担いで、雄は地区の北側、雌は南側へと別れて「蛇の顔見せです」といいながら地区の200戸ほどの家を廻る。顔見せを招いた家の家族が頭を差し出し、蛇はかぶりつく仕草をする。そして、子どもにお小遣いと古札を渡す（写真３）。この時集めた古札は翌日の朝、早尾神社の隣の畑で藁蛇と一緒に燃やす。

三尾神社の隣の長等神社では、１月14日に「綱打祭」として、約30束の藁を使って、大蛇を模した蛇頭と長い尾を作る。蛇頭は大きな口を開

写真１　蛇打ち神事（2012年撮影）

写真２　蛇の顔見せ（2017年撮影）

写真３　蛇の顔見せ（2017年撮影）

写真４　綱打祭（2012年撮影）

写真５　綱打祭（2012年撮影）

けた造作になっており、目は橙（だいだい）を付けている（写真４）。蛇頭は拝殿に飾り、長く編まれた胴体部分は神社の楼門の外までのばされる。１月15日はどんと焼きのため、早朝から氏子たちは尾から胴体へと踏みながら参詣する（写真５）。この胴体部はきちんと編まずに左右が斜めに交差するように緩く編んで道に置いてあるため、どんどん踏み荒されていく。かつては各氏子町が競いあって藁を持ち寄ったので、胴体部分は長等神社から直線距離で700m ほど離れた氏子区域の境界である京阪電車の線路道にまで長く伸ばされていたという。この藁蛇の尾を踏むことで参拝者の厄が藁蛇に移されて、１月16日に氏子が持ち寄った注連縄や古札などと一緒に燃やして、厄が払われる。

この３ヶ所で行われる藁蛇の儀礼は、いずれも最後に燃やすことで氏子の厄を払うが、その方法はそれぞれ異なる。①三尾神社の中保町では一定期間掛けられて、これを燃やした火を煮炊きに使う。②早尾神社の尾花川地区では家々を周り、厄を集める。③長等神社では藁を踏み歩いて厄を移す。

藁を踏み歩くという行為は別の視点でも検討できる。三重県伊賀市平田の植木神社では、かつて年末に歳神の通り道として道路の中央に砂で一筋の道を作ることが行われていたという。年が明けるまで歳神の通り道だからと、崩すことはしない。年が明けると砂を崩しながら参詣する。黒田（2013）は、奈良県大和郡山市にも神社から砂道を引く事例があり、かつては氏子の家の玄関まで砂道を繋いでいて、各家から氏神社までの参詣路を示すとともに、神が各家に訪れることを示していると報告している。

注連縄などの正月飾りは歳神を迎えるためのものであり、どんと焼きで燃やされる。長等神社の藁蛇が、かつては氏子区域の境界までの長さだったことは、正月を終えるに当たって参詣する各家から神社までの道を示していることになる。綱打祭の翌日に藁蛇を、尾から踏みながら正月飾りを持って参詣するということに意味がある。

『日次紀事』（延宝４・1676年序）の「正月十三日」の記述に「綱引　江州大津の人と三井寺門前の人與各々原野に於て左右に別列し互に大綱を引て争ひ両方共に太鼓を撃ち互いに競ひ進む　引勝方其の年各々福を得ると謂ふ　是を綱引きと称す十四日の朝に至て止む」とある。

三井寺門前の人とは現在の南門と北門の前の地域や長等神社の前の地域にあたる、もともと三井寺領だった地域の住民と思われる。この住民と町側の住民が、13日から翌日の朝まで綱引きをしていたとあるので、正月を終えるにあたり、夜通し行っていたことになる。大阪市の難波八坂神社では１月14日（現在は１月の第３日曜日）に八岐大蛇の形をした綱で綱引神事が行われる。氏子区域の人たちは左右に分かれて勝負をして、勝った方が福を得るという。綱引きのあとに、綱を担いで神社の周囲を廻る。小正月に藁蛇を担いで廻るということは、尾花川の蛇の顔見せに類似している。

三井寺の鎮守社のある地域で藁蛇の儀礼が行われているのは、小正月に行われていた綱引きが、それぞれの地区で形を変えて、現在も伝承されている姿と言える。

参考：黒田一充（2013）．歳神を迎える．阡陵，66.

滋賀県立大学人間看護学部　准教授